

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

NO.7 / 2005年 春

子どもの理科離れが指摘されていますが、
もっと怖いのは自然離れです。

🌱地球となかよしインタビュー
子どもに豊かな自然体験を 河合雅雄 ②～③

知っておきたい教育NOW ①揺らぐゆとり教育 今野喜清 ④～⑤
②地球温暖化と「京都議定書」 環境省 地球環境局 ⑥～⑦

有田和正のおもしろ授業発見! ⑦ ⑧～⑨

どこにもない遊びと感動の場 矢島 稔 ⑩～⑪
インフォメーション 北から南から ⑫～⑬

BOOK REVIEW ⑭ 現代の家族と次世代を育む力 その3 渡辺秀樹 ⑮
ほっとな出会い 南こうせつ ⑯





地球となかよし
インタビュー

子どもに豊かな自然体験を 河合雅雄先生 (京都大学名誉教授)

子どもが外で遊ぶという自然も、群れるという自然も、
そういう「子どもの自然」を大人がたくさん奪ってしまった。
それを返してあげて考えないといけない。

◆河合先生は「人類は反自然的存在である」と指摘されていますが、果たして人間と自然との共生は可能でしょうか。

僕は動物学者であり人類学者ですから「進化」ということを常に考えています。生物が生きてきた長い年代があつて、人間もそういう一つの進化的存在なんです。人間は暮らし方というものを非常に大事にしている。動物だっているような暮らし方をしていますよね。森や山や川などの自然を舞台にして進化していった人間も動物の一員だから自然がなければ暮らせないし、自然環境の中でずっと何百万年と暮らしてきた。

ところが、人間は動物と違うところもある。それは文化を作つて、それを増幅していったということなんです。文化というのは芸術や宗教や学問だけではなくて、例えば食べ物というのも文化的なものなんです。何を食べてもいいけれど、米やパンやイモ類など、自分たちで主食を決めている。食べ方もフォークとナイフを使う民族もいれば、箸を使う民族もいる。これも一つの生活文化ですね。人間は自然環境と文化環境という二つの環

境を持つている。それにうまく適応して暮らしていくのがいわけですね。

ところが高度な文明社会になり、文明環境が強大になってきて、自然環境を圧迫するようになった。だから地球環境問題が起つてきているわけです。文化を作るといふことは自然でないものを作っているということだから、人間は反自然的な存在になるということなんです。

文化というものは、必ずいい面と悪い面の両方を持つている。例えば自動車を例に挙げると分かりますね。便利で快適で行動範囲は広がるし、いいところがいっぱいあるけれど、逆に排気ガスをものごく出しますし、交通事故で日本だけでも毎年一万人くらい死んでいます。このようにマイナス面もいっぱい持っているわけです。人間が作った全ての文化的なものには必ず光と影があるということ、常に考えなければならぬ。

◆地球環境をこれ以上悪化させないためにも、子どもの時からの自然体験が大切だと主張されていますね。

僕はよく子どもに「自然に親しめ」と

言っているけれど、なかなか分かってくれない。だからシヨック療法をやつてやろうと思つて、「ボルネオジャングル体験スクール」というものを始めたんです。兵庫県在住の小学校6年生から高校3年生までの男女26人がボルネオへ行つてジャングル生活を体験します。そこに現地マレーシアの子どもが加わります。みんな初めて会う子なんだけど、すぐになかよくなる。これが子どものごいところですね。それに本能的にといつていくらい、小さい子には兄さんや姉さんが教えている。やつぱり弟や妹がかわいという心情を持つているわけですよ。

そして、朝から晩まで自然に触れるんです。それはきついですよ。朝は5時に起きてバードウォッチングをして、夜はナイトウォークで、本当の漆黒の闇のジャングルを歩かせる。怖いですよ。でもこれが子どもたちにいちばん評判がいい。夜は生き物がよく出てきて、懐中電灯で照らすと目がピカッと光る。それを地元

の大学院生が「あれは〇〇ジカだよ」つ

河合雅雄先生 プロフィール

1924年兵庫県生まれ。京都大学理学部動物学
科卒業。(財)日本モンキーセンター
所長、京都大学霊長類研究所所長な
どを経て、現在京都大学名誉教授、
兵庫県立人と自然の博物館名誉館
長、丹波の森公苑長。
著書『少年動物誌』(福音館書店)、
『人間の由来(上・下)』(小学館、
毎日出版文化賞)、『小さな博物誌』
(筑摩書房)、『ニホンザルの生態』
(河出書房新社)、『ゴリラ探検記』
(講談社学術文庫)、『森林がサル
を生んだ』(平凡社)、『学問の
冒険』(佼成出版社)、『河合雅
雄著作集13巻』(小学館)など多数。

て教え
てくれる。
本当にドキ
ドキして感動す
るんです。
そういう中で過
こしていき
くと、みんなもの
すごく生き生き
してくるんです
よ。ボルネオは熱
帯雨林ですから、
70〜80メートル
もある





●ボルネオジャングル体験スクール（兵庫県立人と自然の博物館提供）

大木があります。その木には研究用にハシゴがかけてある。それを見た子どもたちが「登りたい！」って言うわけ。そのハシゴは地面と垂直にかかっている。そこで少し考えた後「登りたいやつは登れ」と言ったら、みんなサルみたいにスルスルと登った。それを見て僕はものすごく感激した。子どもが持っている野生の力が出てきたんです。

すべての子どもが野生の力を持っているはずなのに、日本ではなぜあんなに抑えられているんだろう。それは大人の目が原因だという気がしますね。特に日本は家が狭いでしょう。だからいつもお母さんの目の下にいて、「ああしなさい」「こうしなさい」って絶えず言われているんだらうね。僕なんかの子ども頃は「外に遊びに行つて」と母親によく言われたものです。今の大人は子どもが本

当の自由の中で行動して考えるということとを奪っているような気がします。



◆今、子どもたちは大人の管理のもとで本来の子どもらしさを失っている……

僕はよく「子どもの自然」という言い方をします。子どもという存在が持っている自然のあり方ですね。昔の子どもは山や田んぼで遊んでいたわけでしょう。それが「子どもの自然」なんです。その辺で虫捕りやら魚捕りやらをしていたら、子どもはうまく育つんです。

僕は「子どもが群れる」という言葉が好きなんですけれど、子どもというのは群れて育っていくんです。例えば、サルは生まれて、育てられて、巣立って、大人になって、死んでいくわけですね。彼らも社会的な動物ですから、そういう成長過程の中で社会性を身につけていかなければいけない。それは、子どもの時に群れて遊ぶことで身につけるんです。

昔は子どもが集まって伸びていく子どもだけの世界があった。家庭には子どもが四人も五人もいて、おじいさんやおばあさんもいた。日本にはそういう伝統的な子育てのシステムができていたし、地域もしっかりしていた。

今の子育てや教育の大きな問題は、子どもの数も少なくなり、子どもだけの世界がなくなってきたことが非常に大きな原因だと思ふ。そのうえ文化環境が肥大して情報も過剰で、子ども同士の競争がものすごく激しくなっています。そういう中での子育てをどうするか。大げさに言えば、これは人類が初めて出会った状況だと思います。

◆今の子どもたちの問題で言えば、なぜ簡単に人を殺してしまふ子どもたちができたのでしょうか。

それは世の中が反自然的な状態になっているから、子どもが反自然的なことを考えるんですよ。昔のように子どもがたくさんいて大家族で暮らしている時には思いやりの気持ちや、それとは反対にいじめなどもあった。それを乗り越えてなにかよくする術を身につけられなかったら、生きていくことができないわけです。そういうものは教えられないのではなくて、子どもの世界で自然に身につけていたんです。今の子どもはケンカの仕方とも知らないわけでしょう。

僕たちが子どもの頃はよくケンカをしたけれど、子どもの中でちゃんとルールを作っていた。例えばバンドで殴つちやいけないとか、石を持って殴つちやいけないとか、目は突いたらいかんとか、相手がまいったと言ったらそれ以上はやらないとかね。何となくケンカのルールができていて、それに違反するヤツは卑怯者であるという倫理観が子どもの世界にあつて、それを周りの大人たちが誘導していったのね。

今はそういう状況がなくなってきた。子どもの世界がなくなつて、子どもはみんな大人の傘の下にいて、ずっと監視されているんですよ。だから子どもはすごく圧迫されていると思います。

◆最後に、日本の子どもたちの学力低下問題についてどのようにお考えですか。

国際学力テストで二位から五位になつたとか、そんなことは大した問題ではないと思うんですよ。ヨーロッパの国々は

三十位くらいですよ。それよりも前回も今回も「学校の勉強が楽しい」という項目で日本が最下位だということがよく問題だと思ひます。

僕は「ゆとり教育」に賛成です。子どもの理科離れが指摘されていますが、もつと怖いのは自然離れなんです。理科離れは産業などに影響するけれど、自然離れというのは子どもの人格形成に影響しますよ。今、とてももない子どもが増えています。社会的動物としてのいけばんの基本が抜けているわけです。

だから僕は、学校が変わるべきだと思う。文明社会に生きる子どもたちをどう育てるかといつたら、何よりも子どもの基本的な人格をきちつと育てることがいけばん大事だと思うのね。大人になったら独立して立派な社会人としてやっていく子どもを育てること。小学校でも中学校でもそういう教育を根本にするべきだと思ふ。そのためには基礎学力がつかないといけないから、そういう意味では学力も大事です。でも国際学力テストで一位や二位をとれるような学力をつけようとするから、おかしくなるわけですよ。

よく政治家や学者などが「自分たちが子どもの頃は、学校から帰ったらカバンをポンと放り投げて、日が暮れるまで遊んだものだ」って得意気に話すでしょう。それならどうして今の子どもに学力が落ちたとか勉強のことがかり言うのか、と言いたくなります。

外で遊ぶという自然も、群れるという自然も、そういう「子どもの自然」を大人がたくさん奪ってしまった。それを返してあげてを考えるといいかなと思ひます。それが今の子どもたちの教育の根本だと思います。

揺らぐ「ゆとり教育」

——現場に根ざした改革論議を——



帝京大学教授 今野喜清

「ゆとり教育」が学力を「低下」させたのか

昨年末にPISA（OECD）とIEA（国際教育到達度評価学会）の二つの国際学力調査が公表され、いづれについても日本の国際的な順位の低下傾向が報じられた。以来、「学力危機」の言葉がマスコミを賑わすことになった。中山文部科学相は調査結果を受けて、全国学力調査の実施、「総合的な学習の時間」の削減など学習指導要領の見直し、土曜授業実施の容認などについて矢継ぎ早に発言し、「競い合う教育」の必要性を強調した。こうして現在、来年度中の学習指導要領の改訂に向けての作業が進行中である。

今後の教育改革は特に政治主導による義務教育制度全般の改編を背景としているだけに、教育課程改編の全体構造（理念・枠組）の解明は今後の推移を待たねばならないが、学習指導要領改訂に限定すれば、「ゆとり教育」から「学力向上」への政策転換となることは間違いない。

「ゆとり教育」については早くから賛否両論からする問題点が指摘されてきたが、『ゆとり教育』が学力低下を惹起させた」と喧伝されるようになったのは、数年前に勃発した「学力低下」論争以来のことである。その理由の一つは学校週五日制に伴う授業

内容と時数の量的削減である。「教える内容も時間も大幅に削減されれば、学力が低下するのは当然ではないか」というわけだが、この論理は正当性を持っているだろうか。

PISAの調査でトップの成績を示したフィンランドと比較してみると、年間授業・学校外学習時間共に、日本より少ない。塾・予備校等を含めてのより精査なデータによれば、学力と学習時間に正の相関はみられず、負の相関さえみられるという。（図1・2参照）

これらのデータからすればフィンランドはもちろ

	日本	フィンランド
7～8歳	709時間	530時間
9～11	761	673
12～14	875	815

（注）「図表でみる教育 OECDインディケータ（2004年版）」から。
このデータは2002年現在。

図1 年間平均標準授業時間の比較

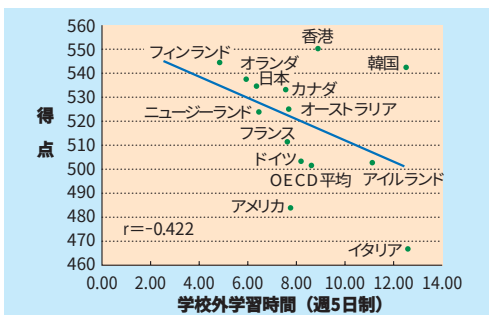


図2 数学的リテラシーと学校外学習時間

んのこと、日本の高校生は少ない学習時間で平均以上（「科学的リテラシー」で二位、「数学的リテラシー」で六位）の成績を挙げていることになる。誉められこそすれ、「もっと勉強しろ」など言えないのではない。小・中学生に対しても同様である。IEAの学力調査（理科・算数・数学、小四・中二対象）では、約三十年間にわたって世界のトップランクを誇ってきたのである。

国際学力調査の統計的分析を瞥見すれば、学力低下の原因は「ゆとり教育」の授業内容と時間の量的削減にある、とする論拠の正当性は見当たらない。つまり「学力低下」問題は単なる学習時間の長短とは別次元の問題として検討されねばならない。したがってまた、現行指導要領が実施されて三年足らずのうちに改訂し、「学力向上」の名目で「総合的な学習の時間」の削減や土曜授業実施を強調することは、是の改革方針で教育現場を混乱に陥らせるに過ぎないことになる。

これまで教育現場では過大な課題を負わされながらも、「授業時間の確保」に創意工夫を凝らしてきたのである。行政は現場の声により真摯に耳を傾けなければならない。

必要なのは学習観の転換

国際学力調査の順位の上下に一喜一憂し、過剰に反応する必要はない。しかし以下の点は検討する必要がある。

これまでのIEAの調査は参加国の教育内容の共通部分を対象とするものであった。これに対してPISAの調査は二十一世紀の社会を、「知識が高度化し複合化し流動化する社会」と定義し、この知識社会に必要とされる学力を「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」の三領域で調査したのである。

マスコミでも大きく取り上げられたが、日本の高

「表現力」に劣ると言われてきたが、PISAの調査は改めてこの弱点を指摘したのである。そしてまた生徒たちの「頑張り」は、偏差値的（要素的）学力獲得をめざして「競い合う」刻苦勉勵型（苦役としての勉強）学習であることを明らかにした。

PISAの指摘を待つまでもなく、受験学力獲得競争がもたらしたさまざまな学習の閉塞化（学習意欲の減退傾向）を開き、未来社会に向けて自ら学び考え、課題解決能力や主体的に「生きる力」を身につけること、それがまさしく「ゆとり教育」の理念であることを改めて確認しよう。

現在進行中の「ゆとり教育」の見直し策は、どんな理念・目的を掲げるのだろうか。文科相がたびたび公言している「競い合う教育」がそれであるのだ

読 解 力	
2003年	2000年
1 フィンランド	1 フィンランド
2 韓国	2 カナダ
3 カナダ	3 ニュージーランド
4 オーストラリア	4 オーストラリア
5 リヒテンシュタイン	5 アイルランド
6 ニュージーランド	6 韓国
7 アイルランド	7 イギリス
8 スウェーデン	8 日本
9 オランダ	9 スウェーデン
14 日本	10 オーストラリア

図3 国際学習到達度調査（PISA）結果比較（数字は順位）

校生の「読解力」と「数学応用力」での低下傾向が明らかになった。たとえば「読解力」は「文章や図表を理解して活用し熟考する能力」と規定され、設問は二十八。一位のフィンランドの平均点は五四三点で、日本は四九八点。前回に参加した国の中で

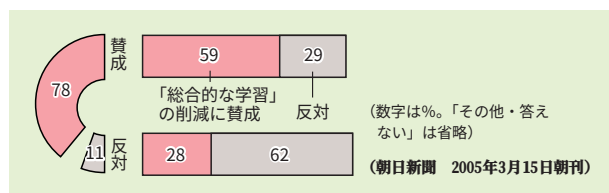


図4 ゆとり教育見直しに…

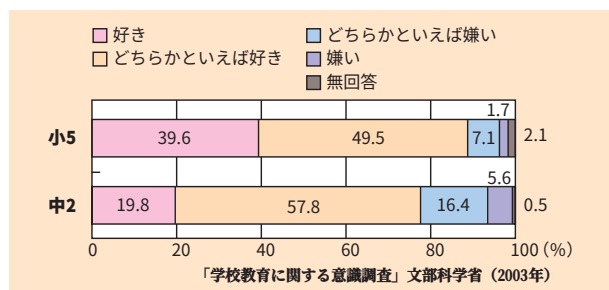


図5 「総合的な学習の時間」の満足感（児童生徒）

ろうか。それともただ基礎的「学力向上」を叫ぶだけなのだろうか。しっかりと注視しよう。

つい最近、「ゆとり教育」に関する世論調査の結果が報じられた。その概要は図4のとおりである。世論の風当りは大変きびしい。だが、「ゆとり教育」の理念（生き方や自ら学び考える能力の育成）については、約七割弱の支持率であることを特記しておく。

世論の動向は単なる「総論（理念 賛成、各論反対）」としてとらえてよいのだろうか。保護者たちの学校と教師に対しての「信頼と期待」が揺らいでいるのではないか。今こそ学校と教師はよりいっそう、保護者と誠実に向き合って対話と交流を深めなければならない。

子どもたちは今現在、「総合的な学習の時間」を大いに楽しく熱中して学習活動に励んでいる（図5参照）。生き生きと輝いて、今を生きている。子どもらしさ（本性）を躍動的に発揮させているのだ。この

「時間」は決して、「学力向上」のひとつで形式的知識を詰め込む「教科学習」に代替されてはならない。

■今こそ、教師と子どもに「ゆとりのある時間」を！

「ゆとり教育」の制度的形態としての「学校週五日制」には、万人が確認すべき二つの原理・原則がある。

一つは、本来学校週五日制は教師の労働時間を短縮し、「ゆとり」を生み出すための制度的保障を意味するということである。端的にいえば、「週四十時間労働を最低基準にしよう」との「労働権」の国際的要請に対応して実現したのである。民間人であれ公務員であれ、「週休二日制」はずっと以前から実施されている。なぜ「世論」は学校週五日制に六割強の「反対」を示すのか。単なる「授業時間の延長」が学力向上とは無関係なのに、なぜ文科相は各学校の「裁量」に任せるとはいえず、「土曜授業」を容認するのか。いづれについてもその真意を問いたい。裁量「が「義務」となり、教師は長時間働くことは当然であった、それが真面目な教師だと評価されてよいのか。「ゆとり」の第一歩は「時間のゆとり」（自由の確保にあることを確かと再認しよう。万人に平等な「時間」がいつしか「管理」の最たるものに転化しないように注意する必要がある。

第二に確認すべき原則は、教育活動のすべては子どもの学習権の保障とその現実化にある、ということである。対応すべき課題は山積しているが、まず第一に、子どもたちがたつぷりと時間をかけて、生き続ける力を身につけるための「居場所」を提供しよう。そこで子どもたちは、自然や社会課題や仲間たちと密接にかかわり合い、学び合い、他者と共生しながら、自分らしさを発揮して「生きる力」の基盤作りに励むことを期待しよう。

地球温暖化と「京都議定書」

持続可能なライフスタイル 「環のくらし」への転換に向けて

環境省 地球環境局 地球温暖化対策課 国民生活対策室

■既に現れている温暖化の影響

■ 昨年は、我が国では地球温暖化の脅威を感じずにはいられない年でした。七月以降、一〇個もの台風が上陸し、二〇〇名以上の死者・行方不明者と家屋などに甚大な被害をもたらしました。

■ 六月に公開された映画「デイ・アフター・トゥモロー」では、地球温暖化が進んだ結果としてもたらされる破滅的な気候変動が描かれ話題となりましたが、北極圏に関する専門家などにより作成された「北極圏気候影響評価報告書」によれば、北極圏では過去五〇年間で気温が最大4℃上昇しており、北極の海水は過去三〇年間で二割減少していることが報告されています。

■ 今後の地球環境を予測した「IPCC（気候変動に関する政府間パネル）第三次評価報告書」によっても、地球の平均気温は二〇世紀中に約0.6℃上昇し、さらに、今世紀中に地球の平均気温は最大5.8℃、海面は最大88cm上昇すると予測されています。このまま地球温暖化が進行した場合、例えば、五〇年後には動植物の最大35%の種が絶滅し、台風の強力化や豪雨、洪水、熱波、干ばつなどの異常気象が頻発するとも予想されています。

■ 日本でも、昨年六月の気象庁の発表では、一〇〇年後の関東地方の夏の気温が九州南部並みになると

予測されました。そして、今世紀末には、二〇〇四年の猛暑がむしろ涼しいと感じるくらい夏の気温が上昇し熱帯のような気候になる可能性があり、これによる熱中症の増加やマラリアの発生、ブナ林の大幅な減少やリンゴや米など農作物への悪影響も懸念されています。

■ 深刻な食料不足や伝染病の増加、これらに伴う大きな経済的損失など、地球温暖化問題は、その予想される影響の大きさや深刻さから見て、まさに人類の生存基盤に関わる最も重要な環境問題の一つとなっています。

■地球温暖化を食い止めるためには？

■ このような地球温暖化の原因となる二酸化炭素を始めとする温室効果ガスは、私たちの生活などから人為的に排出される一方で、海洋や森林などによって自然吸収されています。この排出と吸収の量が均衡している限り、大気中の温室効果ガス濃度は上昇しません。しかし、現実には、人為的排出量の年間六三億トンに対し、自然吸収量は年間三一億トンでしかなく、大気中の二酸化炭素濃度は上昇の一途をたどっています。

■ 地球温暖化を食い止めるには、上昇し続ける温室効果ガスの大気中濃度を、どこかの時点で、安全な

水準に「安定化」させなくてはなりません。そのためには、人為的な排出量を自然吸収量と均衡するまでに減らす必要があります。

■ つまり、今後の排出量がどのように変わるかは、私たちがどのような社会を選択するか的一点にかかっています。

■京都議定書の持つ意味

■ 地球温暖化問題に対処するための第一歩として、気候変動枠組条約の「共通だが差異のある責任」の原則に基づき、まずは、先進国から温室効果ガスの排出を減らすという国際合意がなされました。それが本年二月一六日に発効した「京都議定書」です。

■ 人類がこれから長きにわたって立ち向かうべき地球温暖化対策の第一歩として、二〇〇八年から二〇一二年の間を第一約束期間として、まずは先進国全体で温室効果ガス排出量を一九九〇年比5%削減することが合意されています。我が国は、この第一約束期間の温室効果ガス総排出量を、一九九〇年比で6%削減するとの約束をしています。

■ 今、私たちは改めて京都議定書の持つ意味と、私たち一人ひとりが負っている温室効果ガス削減の責務とを認識しなくてはなりません。そして、京都議定書を取りまとめた議長国として、議定書の6%削減約束を確実に達成するため、議定書の発効後に策定されることとなっている「京都議定書目標達成計画」に基づき、政府、地方公共団体、事業者、国民といったすべての主体が参加、連携して今後の対策に取り組むことが必要です。

■日本の現状

■ ところが、二〇〇三年度における我が国の温室効果ガス総排出量（環境省速報値）は、一三億三、六

〇〇トンに上っています。これは、一九九〇年度の排出量と比べ８％上回っており、吸収源対策等を含め、議定書の削減約束との間に１４％もの開きがあります。

総排出量のうち、約九割を占めるエネルギー起源二酸化炭素について部門ごとの排出量の増減を一九九〇年度比で見ると、産業部門（工場など）が〇・〇二％減と横ばいであるのに対し、運輸部門（自動車、航空機など）が一九・五％増、業務その他部門（オフィスビル、商業施設など）が三六・九％増、家庭部門が二八・九％増と大きな増加傾向を示しています。

京都議定書の第一約束期間は三年後に迫っており、私たちの生活を中心としたこれらの分野における抜本的な取組の強化が求められています。

■「環のくらし」の推進のためには

増え続ける家庭・運輸（自家用車を含む）部門の温室効果ガス、特にそのなかの大部分を占める二酸化炭素を減らすためには、エネルギーの使用を控えることが最もシンプルで有効な対策です。このため、環境省では、持続可能な簡素で質を重視する循環型のライフスタイルを「環のくらし」と名付け、国民一人ひとりのライフスタイルの変革を呼び掛けてきました。

私たちが簡単に行うことのできる「環のくらし」として、家電製品などを買う換えるときに、我が国が持っている新エネルギーや省エネルギーに関する世界最先端の技術を活用した省エネ機器に買い換えたり、ハイブリッド車などの低公害車の使用、太陽光パネルや二重窓の設置を積極的に行うこと等があります。

『消費行動を環境に配慮したものに变えること』、それが地球温暖化の原因となる二酸化炭素の排出を

抑える意味で「環のくらし」の実践活動の一つであると言えます。

■教育現場への支援

国民一人ひとりが地球温暖化対策について理解し、行動に移すためには、これからの社会を担う子どもたちに対する正確な情報提供や環境教育が重要になっていきます。

環境省では、教育現場への支援として、各学校で地球温暖化について授業で使えるように、鮮明な映像で、５分程度の単元ごとに地球温暖化のメカニズムや影響、その対策等を分かりやすく説明したDVD教材「知ろう・学ぼう・考えよう」の無償配付を行っています。

また、英国大使館と連携し、「環のくらし応援団」である「モーニング娘。」の中から「エコモニ。」と地球温暖化対策のPRキャラクターである「コマメちゃん」、英国大使館の環境PRキャラクターである「ブリテンちゃん」による、地球温暖化問題とイギリス

ス英語を勉強できるCD-ROM「解決！地球温暖化！」を配付しています。

環のくらしホームページ

<http://www.wanokurashi.ne.jp/>

その他、大人から子どもまで地球温暖化について楽しく学べる体験型の施設として、港区内の全国各地球温暖化防止活動推進センターの中に「ストップおんだん館」を設置し、各学校からの訪問学習を受け入れています。

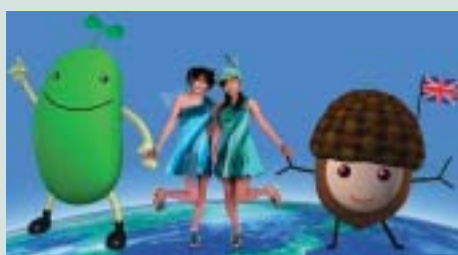
全国地球温暖化防止活動推進センター

ホームページ <http://www.jicca.org>

教育に携わる多くの方々に、地球温暖化について理解を深めていただき、数多くの学校で環境に関する授業を行っていただくことを願いますとともに、次代を担う子どもたちに「習慣」として脱温暖化型のライフスタイルを身に付けていただき、その子どもたちの行動を通して、大人にも地球温暖化防止の取組が広がることを期待しています。



●授業で使えるDVD教材
(小学校高学年～大人を対象)



●CD-ROM「解決！地球温暖化！」の仲間たち
(中学生を対象)



●「ストップおんだん館」案内図



有田和正の
おもしろ授業発見！⑦

ハンバーガーで「ザ・日本人」をつかませようとした実践

鎌谷祥行先生の社会科「中学2年」授業

教材・授業開発研究所代表 有田和正

1. いい授業を見つけるのは大変だ

いい授業、特に、中学でいい授業に出会うことは本当に至難の技である。自分で問いかけておいて、すべて自分で答えてしまうのが中学教師の技である。

「三角形をコンパスを使って書くには、このように書きます。よく見ていて、その通りやってください」といった調子である。

「子どもに考えさせなくては——」といくらいっても聞き入れない。第一、「変わろうという気持ち」が少ない。

そうしたなかで、小学校から中学校に移った鎌谷祥行先生（碧南市立中央中学校）が研究授業をすることになり、期待したのがこの授業である。

2. 藤田さんはなぜこんなことをいったのか？

「藤田 田さんの発言から日本人の生活について考えよう」と、問題を提示した。

日本マクドナルドの創業者藤田 田氏の写真を掲示し、そして、「？」のついた箱を机の上に置いた。



藤田氏は1971年に「アメリカ生まれの商売」を日本で始めるとき、

「〇〇で日本人を金髪に改造する」

といった。「〇〇とは何だろう？」

子どもたちの予想は「ビール、床屋、ハンバーガー、ペンキ、スプレー、薬、絵具、かつら、金ぱく、チーズ」などであった。

教師は「この予想の中に正解あり」といい、どれだろうと考えさせた。

正解は、「この？の箱の中にある。大きさはこのくらいだよ」と、手で大きさを示す。

これでハンバーガーということがわかる。



「日本人は、一年間に平均何個くらい食べているでしょう？」

と問う。40個、60個、90個などと予想する。

「それより、〇〇は、お金のことを金髪と表したのではないか？」と子どもがいう。「〇〇」にこだわって考えているところがいい。投げかけられた問題を考える姿勢はもっている。

3. 藤田さんの意図はなんだろう？

- ・日本人にハンバーガーを広めたいからではないか。
- ・アメリカの食文化を日本に広めたいためではないか。
- ・ハンバーガーで大もうけをしたいと考えたからではないか。

こういった予想が楽しそうに出てきた。

雰囲気はなかなかいい。



ここで、突然、資料を提示。

1971年－5、1980年－264、1990年－776、
2000年－3598 こんな数字が出てきた。

しかし、年数がとびすぎて、この間に何かがあったのではないかと考えられるが、それができない。

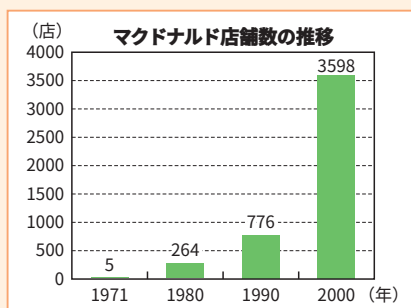
せっかく資料を出したのに、これを見てゆっくり考えさせないのはもったいない。特に1990年から2000年の間に、店の数が激増しているので、ここをつくべきである。

そうすれば、単元を貫く追究問題ができ、今後の展開が更に大きく期待できたかもしれない。まったくおいしいことをしたものだ。

店にきた人「約13億1800万人」である。

日本人の人口1億3000万人で割れば、1人が10回マクドナルドにいったことになる。

このグラフは、藤田氏が、日本でどのように商売しようとしていたかよくわかる。「急激な発展」をつかませるのが、このグラフのねらいのはずである。



マクドナルドの年間来店者数(2000年)

約13億1800万人

『マクドナルド市場独占戦略』中山新一郎著(ばる出版)より作成

4. 日本人はどうしてハンバーガーをたくさん食べるようになったのか？

- 食べやすい
- いつでも、どこでも食べられる
- つくらなくてもよい
- 便利
- おいしい
- 安い
- 忙しくてもすぐ食べられる
- アメリカ人みたいになりたい
- 新しいメニュー
- しっかり食べて、アメリカ人にバカにされないため
- おまけ(おもちゃ)がうれしい
- アメリカに対するあこがれ

問題を出しては予想をいわせ、答えを出すパターンを4回くり返した。考えるというより「クイズ」のような感じで、深まりがなかった。もっと深めてほしいものだ。



5. ハンバーガーで日本人の生活は〇〇になった？

「〇〇に何を入れるか。理由もノートに書いてほしい」と、ようやく「書く活動」を取り入れた。

- 日本人の生活はアメリカ人ようになった
- 洋風になり不健康になった
- 手軽になった
- 便利になった
- 豊かになったような気がした
- だらしなくなった——立ち食いなど。
- 生活が楽しくなった
- めんどくさがりやになった

ハンバーガーが日本人の生活に入り込んだため、上記のように考えたのは「さすが」と思った。スナック食の始まりであるし、健康にも問題が起こってきたことをよく知っている。

つまり、ここで、「ハンバーガーが日本人の生活形態を変えた」、あるいは「変える契機となった」といったことを考えさせてほしかった。

「ひょっとしたら、ハンバーガーはアメリカ食文化の日本への影響の最も大きいものかもしれない」といったつつ込みがほしいところであった。

教え込みはしなかったが、何となくクイズの時間のような感じがした。

それでも、中学ではいい授業なのである。





どこにもない遊びと感動の場

「ぐんま昆虫の森」を開園します

ぐんま昆虫の森 園長 矢島 稔

ぐんま昆虫の森は、身近な自然の中で生き物を見つけ、その体験を通して生命の大切さに気づき、豊かな感性を育むための施設です。園内には雑木林、野菜畑、桑畑、水田など里山の自然があり、昆虫が棲みやすい生活環境を創出しています。このような里山環境の中で四季を通して昆虫を観察することができます。

① 子どもたちはどうしているのか

子どもの頃、身近な生き物といえば、チョウ、トンボ、そしてバッタでした。運よくカエルやトカゲをつかまえると、寄ってたかつて遊びは一層盛り上がりました。別に理科の勉強ではありませんから、形や習性をきちんと覚えたわけではありませんが、思い出すと、カエルの目の閉じ方や脚運びの順番は脳裏に焼きついていて、幼い頃の記憶は驚くほど正確に刷り込まれています。

農林業が産業の中心であった時代の日本人の昆虫観は、虫を見つけると、まず、これは益虫か害虫かということが最大の関心事でした。それほど害虫に苦しめられてきた長い歴史があったわけですから、しかし、カイコをお蚕様と呼んで大切に、家族で養蚕にはげました。これがなかったら生きていけなかった人が多かったからです。

こういう社会が音を立てて変わりはじめてのが一九五〇年代（昭和三〇年前後）でした。農薬が次々と開発され、害虫をあっさり駆除できるようになったのです。肥料も化学製品になり、機械に

よる耕作がまたたく間に広がって、牛や馬が農家から消えていきました。

都市に住む私たちの生活も年ごとに変わり、いろいろな電化製品のおかげで大変便利になりました。情報も映像化され、科学技術の進歩が交通や都市計画そのものを変え、二一世紀はまさにユーロピアそのものと思っていました。しかし、情報通信関係を核とする社会の変化は、人を変え、家を変えそして街を変えました。いま、子どもたちはどこにいます。何を考え、何をしているのでしょうか。

② 「ぐんま昆虫の森」の誕生

こういう現実に対して何とか対策をと動きだしたのが、群馬県の小寺弘之知事でした。知事は、「感動が人を育てる」という考えのもと、勢多郡新里村の四八ヘクタールの里山を利用して、さまざまな自然体験ができる施設をつくりたいという構想を示され、建築家の安藤忠雄さん、映画監督の小栗康平さん、そして私の三人に相談をもちか

けられました。私はそれまで、動物園に昆虫園をつくり、普及活動をした経験がありましたので、具体的なコンセプトを作るよう依頼されました。こうして、「身近な自然（里山）の中で生き物を見つけ、その体験を通して生命の大切さに気づき、豊かな感性を育む新しいタイプの施設にする」というコンセプトのもとに、「ぐんま昆虫の森」が誕生することになったのです。

国の内外を問わず動物園や植物園、それに水族館などは、生きているものを収集し展示して、人々の観覧に供する施設です。一方、今度オープンする「ぐんま昆虫の森」は、生き物がどこにいて、どういう生活をしているかを、直接フィールド（野外）で体験することのできる施設です。

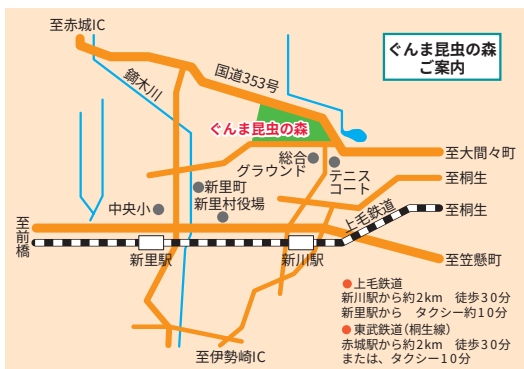
四季それぞれに昆虫や植物は変わりますし、天気が悪ければ探してもなかなか見つけれられないでしょう。もし見つけても、いつまでも同じところにいてくれる昆虫はほとんどありません。そういう困難を承知の上で、利用者に生き物を探してもらうつもりです。もちろん、スタッフがヒントを与えたり、利用者の手助けをいたします。



●南向きの斜面の下に完成した昆虫観察館。手前は草原、水田などのビオトープ。



●安藤忠雄さん設計の昆虫観察館では、昆虫の生態や世界の昆虫の標本を展示。



幼児や小学生の頃に、学びの中で草や虫に興味を持たない人はいないと思いますし、草や虫とふれあうことは、人格の形成の上でも大切な役割を果たしていると思います。詩人の高田敏子さんが作品の中で「花好きの親から花好きの子が生まれる」と表現されているように。

3 捕ることは知るための第一歩

例えば、アゲハはミカン科の植物の葉に卵を産み、幼虫はその葉を食べて育ちますから、ミカンやカラタチがあれば、成虫はいなくても卵、幼虫、蛹は見つけられるはずです。その場所がアゲハの棲める環境であることを学びます。そのようにして体験的にアゲハの生態を理解することになるのです。昆虫の生態について、いくら写真や図解を用いて言葉で説明しても、現場の状態を正しく伝えることはできません。まさに「百聞は一見に如かず」です。

ところが、二〇年くらい前から昆虫採集をやっ
てはいけないと言われてきたために、子どもたち
はもちろん、若い両親や先生も採集を経験してい
る人はほとんどいなくなってしまいました。確か
に殺すために捕るのはよくないことですが、捕らな
いとその生き物のことがほとんど分かりません。
たとえばバッタを捕って、網の上からそと体
をおさえて取り出します。そして、虫めがねで目
を見たり口を見ると、私たちとは全く違う構造を
していることが分かります。容器に入れて飼えば、
どういう草が好きなのか、糞はどういう形をして
いるのか、一日にどのくらい草を食べるか、草の
ほかにどんなものを食べるか、体重はどのくらい
あるか、ジャンプする時どういう姿勢をするかな
ど、いろいろなことが分かってきます。
こうした飼育や観察などを体験すると、バッタ
に親しみがわき、本当に生きていることのすばら
しさが伝わってきます。捕ることは知ることの入り
口なのです。

4 命を大切にすることを育む

「ぐんま昆虫の森」では、六年前から手入れを
した雑木林は以前の状態に戻り、畑や水田、そし
て草原と川の流れも、昔の姿に復元できました。
つまり実物大のビオトープです。

二〇〇一年六月に完成した一五〇年前の赤城型
民家では、周辺に桑畑があって、蚕の飼育が体験
できます。

また、昨年の秋には安藤忠雄さんの設計した昆
虫観察館（地球環境とそこに住む動物の紹介と季
節変化を知ってもらう施設）ができました。

私たち日本人は春夏秋冬、四季の移ろいの中で
暮らし、生活様式を変えます。昆虫も季節変化を
巧みに利用して世代を重ね、見事な生き方を獲得
しています。しかし、南北に長い日本列島にはほ
んど夏だけしかない場所があって、一年中蝶が
飛び交い、ジャングルのような森におおわれてい
るところがあります。こうした「季節とその変化」
を肌で感じてもらうために、観察館の一部に生態
温室を作り、南西諸島の西表島をモデルに再現、
そこに棲息する蝶や小動物を展示します。

そのほか、調べたい人には広い図書室があつて
自由に本が読めますし、係の人にたずねることも
できます。また、フィールドに行つて観察するた
めに、虫めがね、捕虫網など観察や採集に必要な
道具を貸すコーナーもあります。どこに行ったら
何が見られるかというポイントの案内カウンター
も作りました。

自然とのふれあいこそ、生命を大切にすることを
育む方法だと決断した小寺知事ご意思によって、
「ぐんま昆虫の森」は、今年の夏、遊びと感動の
場として全面開園する予定です。

北から 南から

■ 山形県 ■

中高一貫教育で地域に発信・
町づくりに参画金山町立金山中学校校長
青柳 誠

本校と山形県立金山高等学校は、平成10年から中高一貫教育の研究を続けてきた。

授業においては、国際理解教育と情報教育に力を入れている。オールラコミュニケーション（英会話を中心とした学習活動）では、高校の教員やALT、地域の外国人講師の協力を得ながら学習を展開している。また「情報」教育では、コンピュータ技能の習熟を目的として、各種検定にも多数の合格者を出してきた。その結果、生徒のコミュニケーション能力が大きくアップし、地域の奉仕活動や外国人との交流に積極的に参加できるようになった。

体験活動では、町内外の70か所以上の事業所から協力いただき、インターンシップを金山高校の生徒と共にやっている。4日間の活動で高校生からアドバイスを受けたり、ミーティングで意見を述べ合ったりしながら、就業体験を行ってきた。指導の方々からは、ていねいで温かい助言をいただいた。生徒たちは言葉遣いや正しい応接の仕方等を身に付け、自立を目指す進路学習の新たな目標をつかんだようだ。

こうして積み重ねた総合的な学習のまとめを自分の意見書や企画書として、金山高校とのプレゼンテーション交流会で発表している。そこには、中高生はもちろん、町内外の行政担当者の方や企業経営の方々から参加、助言をいただいた。「金山町の将来に明るい展望が持てた」等、次へのステップとなる励ましの言葉をいただいた。生徒たちはさらに活動の場を広げ、地域ボランティアや福祉活動に取り組んでいる。

町の中高一貫教育のテーマは「母川回帰の心を持った大人：金山人の育成」である。これを目標として、自分たちの育った町に貢献できる人間として成長することを願い、今後も努力をしていきたいと考えている。



■ 北海道 ■

「さあ、今日也大漁だ!!」

斜里町立ウトロ小中学校校長
河村隆夫

「オーソイ! オーソイ!」という掛け声とともに、網起こしが始まった。乗組員12名が総出で網を引く。

漁師さんの一人が「ようし、みんな来い!」と叫ぶと同時に子どもたちも一緒に網を引く（ひっぱる）。

網の先端近くになった時、“ピチピチ、バタバタ”と銀鱗の鮭がぶつかり合い船上に反響する。網の中の鮭は、クレーンで直径1.5mほどの大きなタモですくい、船倉に積み込まれる。

この時、船上はまさしく戦場となる。子どもたちは、漁師さんの邪魔にならないように自分の位置を取る。網に鮭がたくさん入っていると、漁師さんたちの顔もほころぶ。

これは、本校の小学校5年生を対象に毎年行っている網起こし体験学習の取り組みの一コマである。社会科や総合的な学習の時間の体験学習として位置づけ、ウトロ漁業協同組合、地元の定置網漁業部の三つの会社の協力をいただき実施している。

数年前までは、小中学校の全員が、地元の漁師さんの船に分散して乗って体験していたそう。教職員の共通理解のもと、より豊かな学習活動の在り方を機軸にしなが、自ら課題を見つけ判断し、生き方について自分の考えを持つ子どもの育成を目指している。

子どもたちは朝5時に集合し、救命胴衣を身に着け乗船する。ウトロには、知床半島沿いに17箇所の定置網の漁場がある。8月下旬より11月まで鮭漁があり、ウトロの浜は活気づく。出漁時には20t未満の船が、早朝に一齐に自分たちの網に向かう。

地元の産業を通して、親や地域の人たちの働く姿から、力強く生きる子どもたちの育成に、今後とも地元の協力のもと実践を重ね、推進していきたい。



■ 長崎県 ■

たくましく育て！ いなさっこ ～地球に優しい稲佐省エネ共和国の活動を通して～

長崎市立稲佐小学校校長
有川政秀

本校は、2年前に「省エネ共和国」を建国し、環境教育に力を入れている。「省エネ共和国」とは、地球温暖化防止に貢献する活動を自ら実践していく人々の集まりであり、経済産業省の外郭団体である「財団法人省エネルギーセンター」が運営している。現在、全国で88団体が加盟しており、サッカーJリーグの横浜FCなどもその名を連ねている。

活動には、全児童・教職員390名が一丸となって取り組むが、あくまでも活動の主体は子どもたちである。大統領は学校長、それを支える節電・節水・リサイクル・地域環境・食料の各省大臣は6年生。そして各省に省エネパトロール隊を組織し、毎昼休み、校舎内を巡回する。「電気の消し忘れ」や「水の出っぱなし」をチェックしたり、古紙の回収を行ったりしている。その結果、節電省では2年間で電気代、391,334円を節約した。これをCO₂に換算すると、32,000kgの削減となり、大きな成果をあげた。

また、6年生の総合的な学習の時間では、「めざせ人力発電」「いい水作ろう稲佐水道局」「達人技でゴミ復活大作戦」などのテーマを設定し、さまざまな人との関わり、貴重な体験学習を展開している。

「稲佐省エネ共和国」は、校内の活動にとどまらない。昨年度は、大阪で行われた「省エネ共和国サミット」に参加した。また、今年度は、長崎市から「長崎エコスクール」の認定も受けた。

「ぼくは世界中を回って、世界の仲間と緑を増やしたい」——子どもが卒業文集に寄せた言葉である。

未来の地球環境を守ろうとする子どもたちが、「稲佐省エネ共和国」から巣立っていく。地球のために共に行動する仲間をきっと増やしてくれることだろう。そんなことを願いながら日々実践している。



■ 愛知県 ■

世界への扉を開こう！ —マレーシアとの国際教育交流を通して—

名古屋市立神丘中学校校長
加藤 実

国際社会の進展が加速する中で、世界各国が担う役割の重要性は、ますます大きくなっている。今や、国際交流こそが世界中の人々の心をつなぐものであるといっても過言ではない。

本校が考える「国際交流」とは、「心の教育」を基盤として、「国際化に対応する生徒の育成」を目指したものである。これからの国際化時代を担う生徒たちに、多くの国際交流体験の機会を与え、国際的視野の拡大、国際理解の促進、視点を変えた見方や考え方、そして国際人としてコミュニケーションを図る力の育成こそが、世界への扉を開ける力になると考える。

本校では、「総合的な学習の時間」で、「国際理解」を課題として進めている。その一環として、平成8年より、マレーシア・ペナン島のハンチャン・ハイスクールと国際教育交流を続けている。毎年交互に30名程度の生徒が互いの国・学校を訪問し合い、多くのことを学び合っている。授業参加、自国文化の紹介、訪問先の地域調査、ホームステイ等、国際教育交流だからこそできる有意義な内容である。

この教育交流に際して、全校生徒がマレーシアについての疑問点や日本との相違点等を考える。そして、現地を訪問する生徒たちがそれらを調べ体感し、帰国後に報告をしている。その結果、マレーシアを訪れる生徒のみならず、全校生徒が課題意識をもち、国際交流の意義を理解して実践する成果を挙げている。PTAも本教育交流に賛同し、PTA国際交流委員会を設立して支援体制を確立している。今後もこの国際教育交流を継続させ、一人でも多くの国際人を育てていきたい。そして、世界への扉を開け、はばたいてほしいと願っている。



傳田健三『子どものうつ心の叫び』(講談社)

子どもも大人も同じ時代を生きている

評者 松尾和美 (スクール・カウンセラー)



「私、うつ病だった」と訴えてくる中学生がいる。インターネットのホームページでセルフチェックしたら、高得点だったと言う。うつは子どもたちが日常的に使うほど広く知られる言葉になった。本書では、三〇〇〇余名の小中学生に抑うつに関する実態調査を実施し、対象児童生徒の一三%、とりわけ中学生の二二%がカットオフ・スコア(抑うつ傾向を示す基準点)以上という驚くべき結果を報告する。

前述の訴えを「得点が高かったからといって必ずしもうつ病とは限らないよ」と片付けることはできない。現代社会を生き延びている大人が多くの不安や閉塞感を抱いているのと同様に、子どもたちも対人関係、将来や人生についてさまざまな不安に揺れ、日々の忙しさに疲れているのである。中学生が憂うつ、何も面白くない、疲れやすいという言葉に引き寄せられ、そういったホームページを開いていること自体、自身の不調を訴えていると思う。

本書はうつ病について解説した上

で、子どものうつ病の始まり、訴え方治療の過程、予後について、症例を示しながらいていねいに紹介する。そして、不登校や心身症といった子どもが呈しやすい状態に潜むうつ病を見分けるポイントや、受診に至った子どもの訴えや親の問いかけを記載している。これは、子どもを精神科やクリニックで診てもらったことのためにためらいを持ち、いつ、どうなったら受診を勧めればよいのかに迷う親や教師の参考となる。

臨床活動の中で、思春期の子どもと話ができないという親の声を聞く。本書には、著者が子どもの気持ちに寄り添い、真摯に向き合っていることをうかがわせる言葉がちりばめられている。著者が本書で示すこのような態度や言葉は、子どもの心を受けとめる時の親のモデルとなるであろう。

本書を通して、親をはじめとする大人が同じ時代を生きる子どもの心の叫びに耳を傾け、子どもとともに不安やうつについて考えるきっかけをつかめればと願う。

ロン・クラーク著『みんなのためのルールブック』(草思社)

人間関係の基本 50のルール

評者 小島宏 (財団法人教育調査研究所)



著者、ロン・クラーク先生は、若干二八歳(現在三三歳)で、ディズニー社の「全米最優秀教師賞」に選ばれた公立小学校の教師である。

この本の五〇のルールは、子どもたちが学校生活を楽しく生き生きと送ることができ、社会に出てからも豊かな人間関係のなかで人生を送ることができるようにとの願いを込めて作られたものである。

クラーク先生は、これらのルールを自分が担任する子どもたちに「どのようルールなのか」、「どうしてこのルールが大切なのか」、「このルールがみんなのためにあるのか」を時間をかけて教えているそうである。

例えば、ルールの3は「だれかがすばらしいことをしたら拍手をしよう」である。「だれかがすばらしいことをしたときには、拍手をして祝福しよう。拍手は3秒間はつづける。大きな音が出るように、手のひら全体が合わさるようにたたこう。だれでもほめられるのが大好きだ。自分の努力がたたえら

れれば、ますますやる気がでてくる。だれかが何かを上手にしたら、それをほめよう。『うまいね』と言うだけでいい」となっている。

私はこの本を二人の子どもの親である娘に贈った。孫に、人間としての基本「自分を大事にする心、他者を思いやる心」を育ててほしいからである。カラーイラスト入りで文章も平易であり、絵本としても楽しい。

また、研修会で知り合った新人教師にもそつと手渡した。質の高い学力の定着や心の教育の充実、本書の内容のような「あたりまえだけど、とても大切なこと」の育まれていることが前提であると思ったからである。

安易に、ドリル漬けによる見せ掛けの学力向上を直線的に求めるのではなく、人間らしい好奇心に基づいた「豊かな学び」の世界に子どもたちを浸らせることが大切なことを改めて思い起こさせられた。そして、その有力な手掛かりを得たように思う。

なお、同名の大人向けの本もある。

Column

現代の家族と

次世代を育む力

その3

渡辺秀樹 (慶應義塾大学教授)



5 ケータイと家族

子どもたちのケータイの所持率は急速に上昇しています。ケータイに代表されるIT社会が家族に浸入して来ています。前回、家族の人間関係が単純化したことを述べましたが、同時に、情報環境の複雑化は圧倒的です。たとえば食卓で、あるいは居間で、目の前の家族と会話をするのはなく、遠くの友人とケータイでメールをやりとりしているという光景は、多くの家庭で見ることができるようにはなっていないでしょうか。

メディア・レテラシーといった情報能力を身につけることは大事ですが、そのためにも現実の生身の人間とのコミュニケーションがしっかりとこなわれていることが必要でしょう。ケータイやパソコンの世界にのみ引きこもることを防ぐにはどうしたらよいか、家族と社会の課題を最後に記したいと思います。

6 コミュニケーションする家族

へすれちが家族と呼ばれるくらい、家族全員が一緒にいる時間は少なくなっています。いつも一緒ならば、言わなくともわかりますが、すれちがうことの多い現代家族は、お互いの理解のために努めて会話を増やしたいものです。夫婦で、そして親子で、その日の出来事などを話すティータイムを設け、ケータイを持たずに集まる時間を確保するのも、ひとつの工夫ですね。

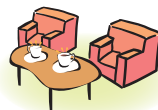
7 ネットワークする家族

夫婦の家事・育児の分担がよくいわれます。分担と同時に「育児の共同」を大切にしたいですね。単純化した現代家族でも、分担であれば親子の二者関係ですが、共同であれば三者関係となり、子どもは、社会関係の基本パターンを経験することができます。育児期を過ぎてからは、家族の共同行動を大切にしたいと思います。

家族が単純化し、誰もいない時間が増え、IT化のなかで生身の人間関係を取り結ぶ機会が減っているところに、地域の安全が危うくなっています。「知らないおじさんに気をつけて」ということも大事ですが、同時に地域の子どもたちの「知っているおじさん」になることが大人の責任ではないでしょうか。地域の安全を確保し、子どもたちの経験をより豊かにするために、「知っているおじさん・おばさん」を地域に多く配りたいものです。子どもたちを萎縮させて、家庭に閉じこめるのではなく、家族を地域に開いて、子どもたちを社会全体で見守りたいと思います。かつて、ヒラリー・クリントンは『皆で子育て (It takes a village)』という本を書きました。次世代を育む力は、家族単独で達成することは不可能です。地域の人々との共同経験や、多様なネットワーク機会を子どもたちに提供したいものです。

読者のページ

Educo Salon (エデュコサロン)



●ご意見・ご感想をお寄せください

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10
教育出版 Educo編集部
FAX: 03-3238-6975
e-mail: nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

●やはり宮城まり子さんのお話が最高！
今こんなハートの熱い教師が少ないから、保護者や生徒の心がつかめない。その結果、学級崩壊や学校崩壊が起きている。また、行政では「ゆとり教育」是正を言っているが、学力不足はそんな小手先のことで解決しない。ハートのある教師が何人いるかで決まる。この話はぜひ教師全員に読ませたいものだ。「ねむの木学園」を創るあたり、「誰もやらないなら、たとえ一人の子でも二人の子でも、それに気づいた私が、自分の家ででもやる」の件では、6年前、「日本には官制でない気軽に相談できる無料の教育相談所がない」と、退職金をつぎこんで設立した「宮之阪教育相談所」のことを思い出し、感無量。(大阪府 中川信雄)

●突然お便りをいたします。私は教育委員会に勤めています。ある日、私の机の上に『Educo』No.6が置かれていました。つ

い読みいりました。興味深い記事が多い。宮城まり子さんへの「ねむの木の子どもとともに40年」には心打たれる。「教師の資質向上と教員制度改革」も興味をそそる。特に『『ビール一杯30万円』って何?』はとてもためになり、興味を持って一読。次回が楽しみです。(福岡県 秋元定憲)

●宮城まり子先生の「やさしくね、やさしくね、やさしいことはつよいのよ」という言葉には、本当に温かさや強さが感じられますね。「やさしさ」は、「愛」を最もわかり易く表現した言葉だと思います。私はいま、調停の仕事もしていますが、「愛」が「憎しみ」に変わり、家庭が崩壊していく姿を多く見せつけられています。夫婦が憎しみ合うようになると、子どもは片隅に置き去りにされ、離婚になればどちらかの愛を受けられない状態になるのです。そうした家庭崩壊が子どもの未来に大きな影を落

としていることは間違いありません。子どもの心に本当の「やさしさ(愛)」を培うことができるのは夫婦の愛がその基盤であること、それが子どもにとって「いっぱい愛情といい環境」になることを忘れてはならないと思います。(北海道 佐藤正和)

●ゆとり教育が批判されはじめたのは残念である。「生きる力」の育成を学校教育、特に義務教育では大事にすべきである。2005年冬号のBOOK REVIEW朝日新聞社の『教師力』から一考。仕事にやりがいを感じている教師が80%以上いることは驚きもし、うれしくも思う。愛媛の教師は95%以上であってほしい。私は常々、「教師は職業であり趣味である」といつてきた。さすれば、教科指導、生徒指導も、教師の創意工夫が生まれてくるはずである。児童生徒と教師との間で、苦悩の中でやりがいをもってほしい。(愛媛県 横手道明)



ほんとな出会い

僕の人生を決めた「神田川」

MINAMI KOUSETSU

南こうせつさん(作曲家、歌手)

◎高校時代 コーラス部の部長だったこうせつさんは同時にアメリカのフォークソングに関心を寄せていた。

高校の二年後輩に歌がうまいという噂の伊勢正三さんがいて、テノールに勧誘したんです。彼はギターもうまかったので、コーラス部とは別にフォークソングのグループも組んだんですよ。コーラス部の練習が終わった後、家庭科室に集まって、Peter, Paul & MaryやSimon & Garfunkelのカバーをして楽しんでいました。

六十年代の終わり頃、アメリカで反戦運動の音楽として起こったのがフォークソングでした。僕らには、Elvis PresleyやFrank SinatraやPaul Ankaに代表されるショー・ビジネスとしての音楽よりも、暮らしの中にあるフォークソングがすごく身近に感じました。自分が表現するのに一番近い音楽だなあと惹かれていったんです。

◎大学進学のため上京し、大学二年のとき初代「かぐや姫」を結成する。

僕がプロモーションで文化放送に行った時に、ディレクターが「お前に会わせたい、面白い男がいる」と言って、当時、文化放送で物書きのアルバイトをしていた喜多条忠さんを紹介してくれました。

背が高くて無口な感じの彼を喫茶店へ誘って、「詩は書かないんですか」と聞いたたら、「僕のは散文詩だから、歌の歌詞にならない」と言うんですね。でも、その時代は社会問題や自分の言いたいことを歌にして喜怒哀楽を表現していくのがアメリカのヒットチャートの主流で、日本にもそういう波がきていましたので、「散文詩でもいいから、書いてもらえないだろうか」と持ちかけたことを覚えています。

時代は七〇年安保が終結しようとしていて、

ある種の敗北感のなかで「これから僕たちはどこへ行くんだろう」となどと語り合いました。

◎喜多条忠さんとの第一作は、「マキシシーのために」という曲だった。

喜多条さんにはマキシシーというあだ名のガールフレンドがいて、彼女も学生運動の仲間でした。そして、彼女は最後まで安田講堂に立てこもり、逮捕されてしまいます。その後、彼女はいくらかベトナム戦争反対を叫び、平和を訴えて運動しても、世の中は変わらないし、人々の支



アーティストとしてだけでなく、大地に根ざした独自のライフスタイルは、多くの人々の共感と支持を得ている。

あの曲はかぐや姫を結成して二年後くらいにできたんです。喜多条さんの歌詞を見た瞬間、あつという間にメロディーができあがりました。僕もその頃同棲をしていて彼の詩の世界と同じような暮らしをしていたので、心情として胸を打つものがあつたんですね。

いい歌ができたとは思ってけれど、スタッフも僕も、だれも売れるとは思っていませんでした。赤い手拭いマフラーにしてとか、小さな石鹸カタカタになったとか、そんな貧しい歌は売れないって言われていたんです。この曲は『かぐや姫さあど』という三枚目のアルバムにB面に入れることになりました。

◎ところが、ラジオの深夜放送から火がつき、「神田川」は予想に反して大ブレイクする。

当時、僕はラジオの深夜放送をやっていたんですが、そこで「神田川」をかけた。そうしたら、ラジオ局に段ボールいっぱいのリクエストのハガキが届いたんです。他の局にもリクエストが殺到し、その人気を追うようにしてシングル盤を出すことになり、あつという間にミリオンセラーになった。

何か、あつさりとできてしまった歌が、こうして大勢の人の共感を呼ぶというのは不思議ですね。でも、今思えばあのメロディーと歌詞が受け入れられる時代の流れと

いうのがあつたような気がします。喜多条さんと出会ってなければ今の自分にはなかった。それくらい「神田川」という歌は僕の人生を決めた歌だなあと思っています。いまでも喜多条さんとは年に何回か会ってお茶を飲んだりするんですが、「いつか還暦を過ぎた頃にでも、また名作を残したいね」と話し合っているところですよ。

●「愛・地球博」が開幕しました。そのメインテーマは「自然の叡智」。従来、万博は人類の未来をひらく科学技術の祭典であり、「人類の叡智」を結集する場でしたが、今回の「人類」から「自然」への転換の背景には、地球環境問題への危機感があることは明白です。「自然との共生」が人類の重い課題となっています。

●河合雅雄先生は大人が奪ってきた「子どもの自然」を返すべきだと主張されています。南こうせつさんもインタビューの余談で子どもの問題にふれ、大人の都合で子どもを囲い込まないで自然の風にさらすべきだと強調されていました。少年による数々の事件は、管理され抑圧された子どもたちの悲鳴なのでしょうか。



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。